先生紹介

国際コミュニケーション学部長

根岸徹郎 教授

ねぎし　てつろう

1958年大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。青山学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。パリ第4ソルボンヌ大学博士号取得。主要な著書にChronologie de Paul Claudel au Japon（共著、Honoré Champion、2012）、論文に「日本が見たポール・クローデル」（2021）、「「斜めから」という奇妙な単語――ジャン・ジュネにおける社会との取り組み方について」（2019）、訳書にマリー・ンディアイ『パパも食べなきゃ』（れんが書房、2013）、ジャン・ジュネ『公然たる敵』（月曜社、2011）、エドマンド・ホワイト『ジュネ伝』（河出書房新社、2003）など

教育者、研究者、そして親として思うこと

「伝わる」ことへの感性を磨く

はじめまして、国際コミュニケーション学部の根岸徹郎と申します。本学部は日本語学科と異文化コミュニケーション学科の２学科から成る小さな学部ですが、経済や法律を学ぶ学校として出発した実学を重視する専修大学の中では、コミュニケーションという目には見えないものを対象とする、いささかユニークな存在です。開設は2020年で、ちょうど新型コロナウイルス蔓延と同じ時期にスタートしたこともあり、さまざまな困難がありましたが、ここまで乗り切ることができました。まだ３年しか経っていない若い学部ですが、「若い」ということはこれから様々な成長をし、専大に新しい力をもたらす可能性を秘めていると自負しています。

国際コミュニケーション学部でわたしが学生の皆さんに感じ取って欲しいと思うのは、単に伝える手段としてのコミュニケーションではなく、触れ合うために何が大切なのかを考えるということです。そこでここ数年は授業で、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の『人形の墓』という短い作品を紹介しています。これはハーンがイネという名の若い娘さんから身の上話を聞くという体裁の物語です。イネの父親、母親が続けて亡くなります。その地方では人が連続して死ぬと人形の墓というものを作って死人が続くのを止めるという風習があったのですが、それをせずにいた兄も結局、間もなく亡くなってしまい、残った家族は散り散りになってしまったという悲しい話です。この物語を聞いたあとハーンがイネの座っていた場所に行こうとすると、彼女はそれを止めるような身振りを見せます。それは座った者の体のぬくもりが残っているところに行くと自分の不幸がうつるのを心配したからなのですが、ハーンはそれを承知した上で、大丈夫だと言ってそこに座ります。ここにはお互いに相手のことを気遣う繊細な気持ちと、それを素直に、そしてしっかりと受け止める心が、体のぬくもりを感じるように広がっています。さらに、迷信などものともせずに強く（名前の通り、稲（イネ）のように）生きていきなさいという若い人に向けたメッセージも込められていると思います。こうした自然な心の伝わり方こそが、国や地域は違っても、また言葉は通じなくとも、コミュニケーションの基本になるのだと思います。「伝える」ことだけではなく、「伝わる」ことへの感性をぜひ磨いてもらいたい、

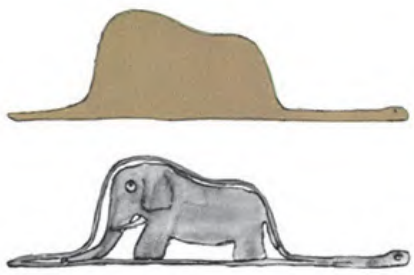
というのが、わたしからの学生さんへの期待です。

フランス文学研究を通して

わたしの専門はフランス文学です。20 世紀に活躍したポール・クローデルとジャン・ジュネという 2 人の作家を主な研究対象としています。クローデルは詩人、劇作家ですが、大正末（1921~1927）に駐日フランス大使として来日した外交官でもありました。当時のフランス大使館は専修大学神田校舎に近い雉子橋（きじばし）のたもとにあり、皇居の内濠を右回りに散歩するのを日課としていたこの詩人大使は、専大生とすれ違うこともあったでしょう。100 年前のお話ですが、想像するとちょっと楽しいです。昨今はあまり文学書が読まれなくなってしまったので文学研究というと古い遺跡調査のように聞こえるかも知れませんが、「想像力」という人間が駆使できる極上の力の成果として、文学作品が持つ力が衰えることはないと思います。「想像力」は書く側、作る側の問題のように見えるかもしれませんが、重要なのは受け取る側です。受け取る方に「想像力」が欠けていると、作品は成り立ちません。最近は「見える化」という言葉をよく耳にします。たしかに発信する側が見えるようにすることは重要でしょうが、本当は受け取る側がもっと「見る」ことを大切にしなくてはいけないと思います。

フランス文学でこの「見る」ということの重要さを分かりやすく示してくれているのは、サン＝テグジュペリでしょう。有名な『星の王子さま』は、「大切なものは目には見えない（L’essentiel est invisible pour les yeux.）」というテーマに貫かれています。冒頭の大きなヘビに飲み込まれたゾウの絵から最後の砂漠の下を流れる水まで、目には見えないけれども大切なものは必ず近くにあるということを、作者のサン＝テグジュペリは教えてくれます。クローデルが語る教えも、やはり同じ意味を持っています。「これは何を言おうとしているのか（Qu’est-ce que cela veut dire?）」という問いかけです。「これは何か」ではなく、何を意味しているのか、何を語りかけているのかを問う力こそが、世界との新しい関係を築くのです。ここで大切なのは、語りかけてくる言葉を聴き取る力です。この点で「見る力」とともに、学生さんにはぜひ「聴く力」もしっかりと養って欲しいと思います。ちなみにクローデルの晩年の著作のタイトルは、『目は聴く』というものでした。

国際コミュニケーション学部での学びを支えるのは、まず日本語と英語、そしてドイツ語やフランス語、中国語といった「ことば」です。けれどもそれ以上に、しっかりと見て、しっかりと聴くという、いわば五感を駆使したコミュニケーションの中にこそ、本当の意味での触れ合いが生じるのだと思います。そのためには「自分を開く」――ラフカディオ・ハーンはこれを「オープン・マインド」と呼びました――勇気と力が大切です。



『星の王子さま』に添えられた、ゾウを飲み込んだ大きなヘビとその中身の図

かつての育友会員として

わたしには娘と息子の 2 人の子供がいます。ともにすでに 30 歳近いので教えている学生さんよりも上、ということはこの文章を読んでくださっている育友会の皆さまよりもわたしの方がおそらく年上ということになりますが、これまで教員をしてきた 30 年ほどの中で 2 度、気持ちを新たにした出来事がありました。一つは専修大学に就職が決まったときで、それまで非常勤講師として教える経験は持っていましたが、専任教員（助教授でした）として 4 月に大学に行ったときに、学生さんの姿を見て「自分の学生」という気持ちがヒシヒシと湧いてきたことを覚えています。

もう一つは、自分の子供が生まれたときです。親になって大学に教えに行き学生さんと接したときに、一人一人のうしろにも必ず支えている親御さんがいるのだということを、はっきりと感じ取りました。それから 20 年弱が経って息子が専修大学の法学部にお世話になり、数年前まではわたしも皆さまと同じく、育友会の会員でした。教員として、そして親として育友会の皆さまの気持ちをともに味わうことができた者の一人として、育友会の役割の大切さを改めて感じずにはいられません。これからも専修大学で一番新しい学部の一員として、ぜひ、皆さまと一緒に学生の方をしっかりと見て、彼らの言葉を聴きながら、その成長を支えていきたいと思っています。